

風神雷神と二十八部衆

三十三間堂の 1001 体の観音像の前に立っているのは、30 体の像である。28 人の守護神（二十八部衆）と、2 人の神の像である。そのすべての起源が古代インドにさかのぼる。三十三間堂では、これらの神々は千手観音の従者であり、仏教の守護者であると考えられている。

前列の両端に立っている、2 体の神の像は、鎌倉時代（1192～1333 年）の傑作として高く評価されている。前列の右端にあり、寺の中に入った訪問者が最初に目にするのが、風神である。雲のような台の上に膝立ちし、ふくらんだ風の袋を軽々と肩の上に投げかけている。風神のもともとのサンスクリットの名前は「ヴァーユ（Vayu）」であり、これは文字どおり「命を吹き込むもの」を意味する。リグヴェーダに登場するヴァーユは生産力や多産に結び付けられている。日本の風神信仰は、避けることのできない自然の力に関する一般的な予兆に由来していると考えられている。同じことが雷神についても言える。雷神像は前列の一番右の端に立っている。雷神もまたリグヴェーダに登場する神で、おそらくその起源はヒンドゥー教の水の神「ヴァルナ」である。日本の中世の時代に人気のあった信仰を反映して、この雷神の像は渦巻くような太鼓のリングに取り巻かれている。この太鼓を雷神が叩くことで、雷鳴が轟くのである。

風神と雷神の間に立つ二十八部衆は、観音の守護神である。それぞれが、慈善、知恵、強さ、そして防御など、独自の神聖な役割を示している。肉体的に最も力強く見えるのは、雷神と風神の隣に立つ 2 人、左の密迹金剛と右の那羅延堅固である。筋肉隆々として、恐ろしげな表情をしたこれらの神は、その巨体と力を使って仏法を守り、無知を退散させる。「金剛力士」としても知られるこれら 2 人の神は、寺院の門を守る守護神として、東アジア全体に多く見られる。

三十三間堂では、訪問者に、像の前に跪いて仰ぎ見て、その水晶の目を見ることをすすめている。寺によると、そうすることではじめて、これら 2 人の神の完全な力と、精緻な芸術性を感じることができるのだという。